中警団新聞
発行所　中部航空警戒管制団 司令部
発行人　藪口幸男
印刷所　明治堂印刷株式会社

中警団一番槍

災派活動に総力

空自延べ人員 9200人

八月十二日(月)午後七時頃、日航機百二十三便(東京発大阪行)の墜落事故により入間基地は、総力を結集して災害救助活動を行い、八月三十一日現在、延べ人員九千二百人、車両六百三十両、航空機百四十機に達した。

事故発生以来、一週間目、捜索、救助活動を懸命に行った結果、陸、空自衛隊員の救助活動により、四人の生存者と四百八十一人の遺体を収容した。入間基地では、機を失せず先発隊(四十人)を発進させるとともに、直ちに第一次災害派遣隊(五百人)を編成し現場に向わせ初動の処置を取った。

引続き第七次までの災害派遣隊を送り、救助、捜索作業を行った。なお、入間基地災害派遣部隊は、基地所在部隊、機関等からの積極的かつ迅速な人員・資材の差し出しを受けて編成されたものである。派遣隊は、現地指揮官=中警団副司令藪口一佐=のもと、全員一丸となって困難な作業を行い、遺家族、地元の人達の感謝と称賛を得航空自衛隊ここにありと、その存在を大いに発揚した。

(関連記事2、3面)

▲出発前の災害派遣隊員に訓示中の基地司令(鍛治空将補)

団司令大滝根を視察

〔27警群〕七月二十三日(火)第二十七警戒群は、中部航空警戒管制団司令鍛治茂空将補の初度視察を受察した。午前十時五分、Vー107パートルで定刻到着。青木群司令以下全隊員の出迎えを受けた。

その後、幹部あいさつなどを受けた後、基地内の各施設をつぶさに視察した。また、団司令の部隊表彰においては、当基地が昭和三十四年米軍から移管以来、初の第三級賞状を授与、職務遂行に功績のあった幹部二人への第四級賞詞を与えた後、特に本来の任務遂行と新バッジ導入を計画的、円滑に受け入れるよう強調し、次のように訓示した。

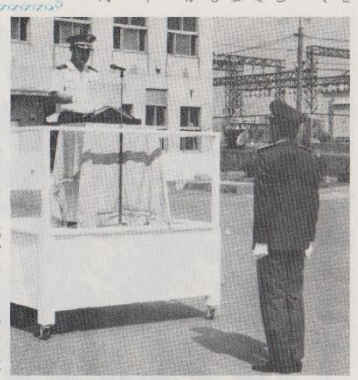
本日、好天に恵まれて、直接諸官たちに会うことができて、喜んでいる。群司令から状況報告を聞き、現場の諸官たちの勤務ぶりを直接拝見して、指揮が旺盛でよくやっているということを感じた。

今、三点について表彰を実施したが、第一点の部隊表彰については「無事故・無違反」が三年におよぶ功績は、歴代群司令の統率はもちろんのこと、隊員一人ひとりが職責を自覚した団結の賜であり、諸官たちの努力に対し敬意を表する。

第二点については、二人の個人表彰を実施したが、一点は新バッジに絡む大規模なオペレーション内の器材移設を自らの手でやり遂げたという実力は、各警戒群の手本であり、能力が高いことを痛感した。

二点目の要撃管制については、本人の努力と後輩育成の奉仕の精神が認められたものであり、特に優秀であったと認められる。

六十年度は、新バッジ建設の本当の正念場であるので、正面におけるミスを防止しつつ、万全を期してもらいたい。今後とも、青木群司令を中心として、益々精強に向って努力することを期待する。



▲部隊表彰(第3級賞状)を受ける27警群司令(右後向き)

中空司令官串本・大滝根視察

〔27警群・5警群〕中部航空方面隊司令官松永貞昭空将は、七月九日(火)と七月二十三日(火)、それぞれの基地を初度視察された。入間基地から飛来した司令官搭乗のV・107は、好天の両基地に定刻到着した。

そして大滝根山サイトで司令官は、青木群司令以下全隊員の出迎えを受けたのち、一連の視察日程を精力的に消化。その後、庁舎前広場に集合した隊員に対し、次のような要旨の訓示をされた。

「中空北端の枢要なサイトで勤務する諸官は、全国に先駆けて建設される新バッジシステムが、これからの航空自衛隊の発展に大きく影響を及ぼす事業であるから、全員が熱意をもってこれと取り組んでもらいたい」

と結んだ。また、串本サイトで司令官は「奈良の帝都候補生学校長当時に当サイトを訪問した時を懐しみ、今の基地が整然とし、勤務している隊員も生き生きとしている姿に接し力強く思っている。今後共、群司令を中心に和気あいあい、積極進取の気概で任務に励んでもらいたい」と訓示し、初度視察を終えて離隊された。

群司令交代

〔経ケ岬〕八月一日付で新群司令唐鎌繁二佐(写真)が北警団司令部から着任した。着任式当日の早朝、早速群の熊勢移行訓練、たんご六X一号を発令し、隊員を一喝するとともに、着任式の訓示において

一、本務を大事にせよ。

二、労を惜しむな。の二点を統率方針に掲げ力強くスタートした。

防大七期生、家族を九州におき単身赴任、趣味はゴルフ、囲碁、テニスと多才である。

なお前群司令高橋勇行二佐は空幕援護室へ栄転された。

続・想像力

第五警戒群司令
二等空佐　横山俊夫

人間は経験の動物であり実際に自分が経験してみないと物事はなかなか正しく理解できないものであるが先人の尊い経験を活字等から自分の経験と同じように想像力を逞しくして消化することが大切である。というような方法で、どのような精神状態で実施しているかということは、文章や口頭の説明では十分解できない事が多い。そこで現場進出ということになるが、想像していた状況と実際とができないということにも全く異っていてあっと驚くことがある。これは自分自判断の基盤であるが豊かな想像力(洞察力というべきか)は的確な判断の鍵であると思う。

どのような能力を備えた者が、どのような環境下でどのような作業を、どのようなことがままある。それはまた、的確な現状認識に基づいたポイントを押えた説明がなされていないので正しい想像(イメージング)ができないということにもなる。想像力というと、このような事実に基づくイメージングのほかに、新しいことを作り出す精神的活動が問題になる。想像力は創造力に通ずる。

何か新しい事を起す場合の計画立案では、想像力が豊かかどうかが計画の優劣を決める場合が多い。凡人は想像力がなかなか働かないから過去の例を一生けん命探したり、ひな型に無理矢理はめ込んだりする。通常上司は部下より知識や経験が豊富だから、計画案などを持ってゆくと、より多くの様々な状況を仮定するからそれ以上に想像力を巡らした対応策を案出しておかないとなかなかパスしない。

しかし経験を重視すぎ、これにこだわると知らず知らずに自由な精神活動を損なってしまう。固定観念に捕らわれてしまうのである。

子供の教育を論ずる時、型にはめた教育は創造力の芽を摘みとるということが必ず問題になるのに関係がある。一時期ブレンストーミングというのが流行したが、これなどは自由な精神活動を活発にする上で優れた手段の一つであると思う。

活発な部隊行動・運営の根底にはこのような自由な精神活動が不可欠だと思う。私達は日頃から、そこを育むよう心掛けが必要だと思う。

けやき

今年の旧盆は、強く明るい夏の陽射しとは裏腹に、長く暗い毎日であった。五百二十名という尊い命が、一瞬にして奪われたのである。おそらく、その一瞬まで、自らの明日を信じて疑わなかったであろう人々の事を考えると、それはあまりにも痛ましく、無惨である。しかし、振り返ってみると、これは明日にも、私たちの身に起きるかもしれない危険でもある。

▼現在、私たちの社会の輸送能力は、非常に発達している。そして、その最先端を行くのが、航空機による輸送である。より速く、より遠くへ、より多くの人々を。おそらく、航空機(特に大型航空機)の驚異的な進歩には、こんな言葉が、一番似合うであろう。しかし、それは同時に、より大きな危険性を伴っているという事を、今回の事故は、私たちに示唆している。

▼人間は、長い間、鳥の翼をうらやみ、あのように、自由に、速く飛ぶことができたらと願ってきた。そして、遂にそれを手に入れたのである。しかし、もし本当に神様が人間を飛ばせようと思ったのであれば、人は、生まれながらにして、翼を与えられていたはずである。いわば、ある意味で、私たちは自然の摂理に反しながら、自らの文明を発展させてきたのである。それゆえに、時には謙虚な気持ちで、自らを振り返り、驕る気持ちを沈め、常にあるべき原点に帰らなければならない。(あの、ギリシア神話に登場する第二のイカロスとならないためにも)航空機においては、その原点が、「安全性」という三文字であったのだが。

▼暑い陽射の中、日夜、捜索、収容作業に従事された方々の努力に敬意を表すると共に、亡くなられた方々の霊安らかにと祈る。

(基群、案田子)

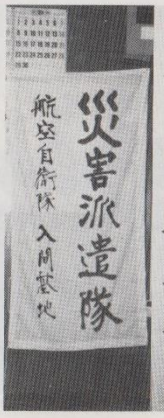
「を目で追う」

基地をあげて救助支援

▼八月十二日(月)午後八時三十二分、東京空港事務所長(羽田)の要請により、日航機(東京発大阪行一二三便)墜落事故に伴う、災害派遣実施に関する中部航空方面隊行動命令が下令された。

入間基地司令(鍛治茂空将補)は、機を失せず直ちに在入間所在隊員に対し非常呼集を発令した。二十時四十分入間基地から、四十三人の先発隊を現場に向け出発させた。

◀WOC内に災害派遣指揮所設置
同災害派遣隊旗も掲げる



▼八月十三日(火)午前一時五十分、中警団副司令(藪口一佐)を指揮官とする五百人の第一次災害派遣隊を編成し、現地へ向け発進。当初、現場が確定できず、風情報がみだれ飛んだが、先発隊は午前三時五十分に長野県北相木村小学校に対策本部を設置し、直ちに指揮所を開設し、救助活動に入った。

基地では、午前八時三十分現場へ派遣捜索・救助活動に入る。

現地は山が深く、落下地点までの道程は、両手で草や木をつかみながら登らなければならず、道がなくヘリコプターの誘導なくしては現場にたどりつけぬほどで救助活動は困難を極めた。また、事故現場の悲惨さは目を覆うばかりであり「海行かば水漬く屍、山行けば草むす屍」であった。

▲災害派遣隊を激励する鍛治基地司令

▲勢揃いした災害派遣隊員(在入間部隊)

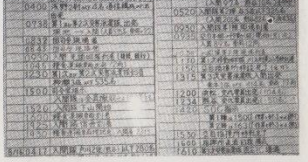
◀川上村現地指揮所

しかし、幸いなことに、この日(十三日)四人の生存者が確認救出され、隊員の中から大きな歓声が上り、隊員一同疲労も忘れ救助活動に一段と励みがついた。その後の懸命の救助活動にもかかわらず生存者は発見できず、午後七時四十分事故二日目の捜索を終了した。

▼十四日(水)午前一時三十分、入間隊第一陣(柳瀬三佐以下百七人)午前五時二十分、入間隊第二陣(谷三佐以下三百二十六人、車両十七両)は現場に向った。第一陣、第二陣は午前九時三十分と午前十時三十分現地に到着と同時に遺体収容作業が開始された。なお本日から熊谷、静浜、浜松の各基地も捜索隊に参加した。

連日の猛暑と多湿により、遺体のいたみも激しく作業は難渋を極めた。しかし、遺族のかたたちの気持を思うと、一時も早く遺体を収容し安らかに眠ってもらおうと全隊員が一丸となって作業に邁進した。なお、この日(十四日)現地指揮所は、北相木村から川上村の第二小学校に移転した。同日、午後一時十五分、入間隊第三陣(倉本三佐以下四百十四人)を出発させ、午後七時現場に到着した。当日の作業は午後八時五十分終了し隊指揮所で受察した。災害派遣隊一同、思わぬ陣中見舞いに感激もひとしおであった。遺体収容作業継続。「山肌に誰が手向し花一輪」一日も早く全員を見つけたい。

▶災害派遣状況・経過



▼十五日(木)午前四時三十分、入間隊第四陣(磯野一佐(浜松)以下二百九十七人)を発進させた。午前八時三十二分、中警団司令(鍛治空将補)は、現地視察と隊員激励のためヘリコプターにより現場に到着し、現地指揮官(藪口一佐)の報告を受け、隊員の労をねぎらった。午前九時三十分、第四陣現場到着。

テレビや新聞を見た入間基地近傍の人達から励ましの電話や手紙が数到した。曰く「自分は今迄反自衛隊であったが、テレビ・新聞で自衛隊の活躍している姿を見て、自分の意識を変えた。これからも頑張って下さい」「自衛隊の底力を見せてもらった。十分信頼できる」「おじちゃん、ありがとう、がんばって下さい」などなど。

また、入間航友会、隊友会などから隊員激励の差し入れも届いた。入間隊第一、二陣は同日任務を終了し、第三、四陣に後を託し、それぞれの基地に撤収した。

▼十六日(金)午前四時十七分、入間隊第五陣(戸川二佐(熊谷)以下二百八十人)出発。遺体のいたみ激しく収容作業は、困難を極めたが、その困難な状況の中での隊員の真摯な姿は、遺族をはじめ全国民の大きな共感を呼んでいる。

▼十七日(土)防衛庁長官および航空幕僚長の視察があり、陸上自衛

▲加藤防衛庁長官、森航空幕僚長も現場で隊員を激励

▼十八日(日)本日から百里・小松の両基地も捜索隊(清水二佐(百里)以下百七人)に加わり活動を開始した。空自隊員による、航空機の胴体下での多くの遺体(50～60体)が発見され収容された。遺体が次々に発見されるたびに、早く遺族のもとへ帰って安らかに眠って下さいと願う気持で一杯であった。午後三時、入間隊第三・四陣帰隊する。

▼十九日(月)遺体収容作業継続。南雲一佐(浜松)以下百十二人現地到着し、捜索活動に加わる。

▼二十日(火)本日より捜索範囲を広げ、ローラー作戦を開始した。また、現場は終日雲中であった。

▼二十一日(水)前日に引き続きローラー作戦を実施。捜索活動あまり進展せず。

▼二十二日(木)引き続きローラー作戦実施。入間基地から捜索隊(生出一尉以下百四人)を派遣し、現地隊員と交代した。

▼二十三日(金)ローラー作戦継続。本日、部分遺体四十二体を収容した。遺族の方の気持を考えると一日も早く全員を見つけたい。

▼二十四日(土)空自による本日までの遺体収容の成果、収容遺体一、部分遺体百四十、検視済遺体四百九十一、身元確認済遺体四百六十七、残り遺体の一時も早い収容と身元確認を天に祈る。

▲墜落現場へ遺族のたむけの花

▼二十五日(日)現地指揮官交代、八月十二日(月)事故当日から現場指揮官として、泊込みで現地で頑張っていた中警団副司令(藪口一佐)は、本日、午後一時、現地で中警団整補群司令(金子一佐)と指揮官を交代し、午後四時入間基地に帰隊した。同副司令の労をねぎらい、団司令以下中警団直轄部隊長および司令部各部等の長が出迎えた。副司令は疲れもみせず元気に団司令に現場の状況をつぶさに報告した後、WOC勤務員をねぎらわれた。

なお、午後一時現地指揮所を、川上村第二小学校から、川上村村営体育館に移転した。

▲現地指揮所での作戦会議

▲現地指揮を一時交代し帰隊した藪口副司令と基地司令

特集「災害派遣

▼二十六日(月)本日から災害派遣と併行して、中空総演が開始された。隊員の疲労も目につきだし、その健康管理に意をそそぐ必要が生じてきた。派遣隊員は勿論のこと、残留隊員も皆、精一杯の努力している。頑張ろう後一息だ!!

▼八月二十七日(火)午前四時、中谷三佐以下六十五人で宿営地出発し、同八時二十分現場到着、ただちに遺体捜索活動に入る。午後三時過ぎまで捜索したが思わしい成果上らず宿営場所である川上村村営体育館へ重い足どりで向う。

▼八月二十八日(水)午前十時、現地指揮官を一時交代していた中警団副司令(藪口一佐)が復帰し正午、指揮移転で整補群司令(金子一佐)と交代した。捜索活動は引続き実施。

▼八月二十九日(木)遺体捜索活動も終りに近い。しかし、全遺体収容確認済という言葉も聞かずに帰隊するのは非常に淋しい。「立つ鳥後を濁さず」で、大変御世話になった川上村第二小学校や同村営体育館ともさよならだ。

そして、川上村小学校の子供達、同近在の方たちの心暖たまる御支援本当にありがとう。

▼八月三十日(金)災害発生以来、現地へ派遣されていた隊員も入間基地所在部隊隊員の出迎えるなか、指揮官藪口一佐(以下車両十六両を含め移動し待機の態勢に入った。D・2グラウンドで基地司令(鍛治茂雄将補)に申告、災害派遣隊の指揮を解かれた。ただし、遺体の確認作業が思うにまかせず、遺族の人々が郷里へ戻れないのが心に残った。

▲リレー式に遺体収容作業を行う空自隊員

▲道なき道にロープを張って(その1)

▲現地指揮を執る藪口1佐

▲災派の状況を聞く基地司令

▲現場の惨状に思わずぼうぜん!

▲道なき道を谷越え野越え(その2)

▲出発する車両を1両ごと見送る

▲災害派遣隊が大変お世話になった川上村の石碑

▲帰隊の都度災派隊に労をねぎらう基地司令

▲2度目の災派大坪1曹頑張る

▲川上村第2小学校体育館でひとときの憩いとする災害派遣隊員

▲険しい坂道での遺体収容作業

▲災害派遣の正装スタイルです

川上村第二小学校生徒による災派隊員への作文集

▼この作文集は川上村第二小学校の子供達が遺族の人々に励ましの手紙と千羽鶴を折って送ろうとしていた時、隊員との間に接触があまり無かったことから昼食会を設け招待してはと言うことで、その時の招待へのお礼返しとして送られたものです。

じえいたいのひとへ

一年　のもとあけみ

きのうは、ごはんありがとうございました。とってもおいしかったです。いつもおしごと、ありがとうございます。わたしは、とってもじえいたいのひとをとってもすきです。

きのうのごはんは、とってもいっぱいはいっていましたね。

じえいたいのみなさんへ

一年　いとうなおと

はじめて、じえいたいのつくったごはんをたべたらとてもおいし

(4面下に続く)

京都府知事 隊員を激励

〔経ケ岬〕林田京都府知事は、国道一七八号線バイパスおよび新間人トンネル開通式典参加のため、七月九日丹後地方を久し振りに訪問した。

丁度、海水浴シーズンの幕明けと重なり、地元ではいろいろな歓迎行事がとり行われた。繁多なスケジュールにもかかわらず、当サイトと勤務する隊員の激励をしたいとの県知事の強い要望により、部隊訪問が実現した。二十八年の部隊歴史上始めてのことで、受け入れに万全を期した。

地方振興局長および地元町議会議長らを伴って部隊に到着した知事は、高橋群司令以下隊員の出迎えの後、状況説明を熱心に聞き入り、質問も飛び出すなど、自衛隊に対する関心の深さを偲ばせた。

隊員食堂で行われた講話は、自衛隊訓練の話により、僻地に勤務する隊員の労をねぎらった。

講話内容は「スマート」「サイレントネービー」「ステディ」の所謂旧海軍の三Sの精神は、年代が変った現在でも大切であるということを解り易く諭し、隊員に深い感銘を与えた。

事は、高橋群司令以下隊員の出迎えの後、状況説明を熱心に聞き入り、質問も飛び出すなど、自衛隊に対する関心の深さを偲ばせた。

隊員食堂で行われた講話は、自衛隊訓練の話により、僻地に勤務する隊員の労をねぎらった。

講話内容は「スマート」「サイレントネービー」「ステディ」の所謂旧海軍の三Sの精神は、年代が変った現在でも大切であるということを解り易く諭し、隊員に深い感銘を与えた。

設など約二時間にわたって見学した。

刑務所というと、すぐに赤レンガの高い壁を想像するがここにはそれがなく、受刑者は開放的な環境の中で、規律正しい受刑生活を送っている。

昨年度は五百四人の受刑者が入所し、業務上過失致死・同傷害・違反の制合がそれぞれほゞ与つを占めていたという。

現在入所中の二百十人余の受刑者・禁固刑・懲役刑も「飲酒運転」「無免許運転」「違反（速度等）」に加えて業務上過失致死・同傷害の罪科のあるものも多く、なかには五億円もの賠償金を負っている者もいると聞く。

六十三歳から二十歳までの受刑者。平均入所期間九・七か月であった。いかに開放的な環境とはいえ、そこは刑務所であり、その中での受刑者生活である。

所内施設等見学時に、各所で作業中の受刑者を見たが、その後姿に犯した罪をつぐなう者の、きびしさ」を感じた。そしてその後姿に、一日も早い更生・出所を念じるとともに、自らも車を所有しハンドルを握る身として、当刑務所の受刑者処遇の基本方針でもある「人命尊重・遵法精神（の涵養）」について思いを新たにしつつ帰隊した。（一見学参加者）

▲熱戦を展開中の23警戦士

群武道大会で 仲摩三曹（通電隊）が優勝

〔輪島〕七月五日、群武道大会（剣道、銃剣道）が、基地体育館で行われた。開会式終了後、剣道個人戦を幕明けとし、引き続き銃剣道個人戦が行われた。

各人気迫のこもった戦いの結果、剣道は若さと練習量に勝る仲摩3曹（通電隊）が優勝し、銃剣道はベテラン堂前2曹（基業隊）が優勝を飾った。この中で剣道一位の三野曹（通電隊）が優勝し、銃剣道は一曹は今迄の大会でも上位を占め、そのベテランの味にひときわ拍手も高かった。

午後から行われた銃剣道団体戦は、層が比較的薄いと思われた監管隊が大健闘し、通電、基業に快勝して優勝を飾った。

二位通電隊、三位基業隊の順であった。

遠泳訓練終る

〔経ケ岬〕第三十五警戒群では八月十四日午后、参加者四十三人で遠泳訓練を実施した。中浜港をスタート約二キロのコースを水温は少々高温であったが二十三度、波、風、くらげゼロ、二艘の監視舟に見守られ全員完泳した。

七月十四日の海開き以来、連日隊舎裏の訓練場で特訓を受けた成果を発揮し、昨年と同じコースで大団りする予猶をみせる隊員も見られた。監視舟には着任早々の群司令も乗り込み、盛んに声援を送った。この静かな日本海も水紙発刊の頃には波浪注意報が度々発令される荒々しい海となっているだろう。

▲遠泳訓練に張切る隊員

基地隊員 市原（交通）刑務所を見学

〔峯岡山〕基地は、隊員の交通安全意識高揚のため、七月十八・十九の両日東京矯正管区内の交通事犯受刑者を収容している市原刑務所（県内市原市磯ヶ谷、当基地から車で約二時間）の見学を実施した。

両日とも二十六人の隊員がこれに参加、部隊車両で十三時に同刑務所へ着き、庶務課長による全般状況、スライド投射による受刑者生活の説明を受けた後、所内各施設等見学。

各隊共、今大会に賭ける意気込みはものすごく、寸暇を惜しんで練習に励み、いやが上にも大会熱は盛り上がりを見せた。特に、群本部は群司令の作戦か否か定かではないが、足ひれなる秘密兵器まで持ち出し密かに優勝を狙っていたようであった。しかし「自称オリンピック選手」と豪語する選手達を擁する通信電子隊は、下馬評どおりの強さを発揮し、完全制覇は逃したものの、他隊を圧倒、前回大会に引き続き優勝杯を手中にし、群水泳大会の幕を閉じた。

大会結果は次のとおり

総合得点

一位　通電隊（九一九点）
二位　監管隊（五十点）
三位　基業隊（四十点）
四位　群本部（十七点）

こちらは水泳大会 通電隊優勝を飾る

〔輪島〕昭和六十年度群水泳大会が、八月九日（金）炎天下の中、松陵中学校プールで開催された。同大会は、二年ぶりの大会であり前回の大会では、監視管制隊と通信電子隊が僅差で優勝し、今大会も、二年前の雪辱を期す監視管制、基地業務両隊と、今大会も本命視される通信電子隊、そして未知の力を秘めた群司令引きいる群本部の争いとなることが予想された。

恒例の花火と盆踊り 「さかど太鼓」も競演

八月二十日、昭和六十年度入間基地盆踊り花火大会が行われ、午後五時三十分、基地が解放され、電車やバスで大勢がつめかけた。会場となった基地DT2グラウンドには一万二千人余りの人場者でにぎわった。

◀会場での司令官と基地司令

会場来賓席には、招待の国会議員、県議会議員、狭山・入間両市長、花火大会協賛の航友会会長同会員、米軍横田基地司令官や同奥様たち、日本民謡踊りを得意とする「七夕ダンサーズチーム」などの人々が列席、会場周囲は、基地売店会や基地隊員の趣向をこらし残し散会した。

最高潮に達した。

恒例の花火は、午後八時三十分栗原煙火店自慢の早打ち「柳に電光乱打」に始まり連打「夜空に競う星の花園」では、会場のあちこちから、ため息と歓声がもれ、スターマイン「入間基地納涼大会」で三百発余り最後を飾る大花園」で三百発余りの花火は、拍手と喝采のうちに終了し、三三五五夏の夜空に思いを

踊りは「東京・秩父音頭・炭鉱ういうごはんじゃないんですね。

節」などの名調子に乗って、各人各様の振りが披露され、一輪で始まった踊りの輪も、隊員や婦人団体で二重、三重とふくらみ、「さかど太鼓」保存会有志による競演で興も一段と盛り上り、盆踊りも

▲さかど太鼓ちびっこ連

◀三夜踊りで観光協会会長賞受賞の輪島隊員有志

部隊をあげて三夜踊りに参加

〔輪島〕二十三警戒群は、孟蘭盆の八月十四、十五、十六日に行われる輪島市の三夜踊りに参加し、コンクールで優秀な成績に輝いた。

この踊りは、各種団体やお盆で帰省する人達が参加して、年々輪が大きくなり、輪島川三角洲広場から今年は、商店街の公道を、車を締め出して行なった。

この踊りに群を挙げて参加することとなり、講師を招いて二週間十九時から二十時過ぎまで、猛特訓を行なった。踊り自体がスローで、振り付けが難しいため、皆マスターするのに一苦労であった。

当日は、揃いの浴衣と菅笠をかぶり、群司令の「やるぞ」の一声で全員、黙々と踊り、一時間に亘り、その統、された美しさを見せ、観光協会会長賞に輝いたものであるが、打上げ会で、来年はもっと練習して、「三夜踊り」を自分のものにすると皆張切っていた。

航空自衛隊のみなさんへ

五年　林　りえ

航空自衛隊のみなさん、昨日の昼食どうもおまねきいただきありがとうございました。自衛隊のみなさんと、楽しい昼食会ができ、うれしかったです。昨日の昼食、とてもおいしかったです。

おかわりをする人もいたし、おなかがいっぱいになって、おかわりができなかった人もいました。私もおかわりしようと思いましたが、おなかがいっぱいになってしまったので、おかわりができませんでした。

そして私が「おかわりできない。」と言ったら自衛隊の人が、「おかわりしないと背がのびないぞ」と言ったから、私はその自衛隊の人のせなかをはたいてしまいました。そしたら、その自衛隊の人が「いて―!」と言ったから大わらいしました。そして私が「食器どこにかたづけるの」と聞いたら、「自衛隊の人達がかたずけるから、そのままにしておいていいよ」と言ったから、私はとてもうれしかったです。

自衛隊のみなさん、このいそがしいなか、昼食会を開いていただき、本当にありがとうございました。

自衛隊のみなさんへ

六年　関　一三

自衛隊のみなさん、毎日毎日暑い中を、ご苦労さまです。ぼくたちは、とても苦労されているみなさんに、少しでも協力できた事を、とてもうれしく思っています。現地での、大変さはぼくたちには分かりませんが、少なくとも以前よりは皆さんの仕事の大変さが分かりました。

犠牲者の方々の、遺体の収容作業も大変でしょう。そんないそがしい中で、食事に招待していただき、ありがとうございました。とてもおいしく、とても楽しみなさんといっしょに食事をすることができて、うれしく思っています。

ほんの少しだけの間でしたが、みなさんと親しくできたと思います。この事も、いい思い出になると思います。本当にありがとうございました。

（3面下より続く）

かったです。どうやったらあんなにおいしくつくれるんですか。

ひこうきがおっこってえらいことになってしまいましたね。いろいろそうさくしてくれてどうもごくろうさん。

じえいたいのみなさんへ

四年　井出毎子

八月二十二日の昼食をじえいたいのみなさんといっしょに食べさせていただいて、どうもありがとうございます。あのときのカレーやサラダとてもおいしかったです。あのとききいたけど、いつもはこうなんですか。

自衛隊のみなさんへ

六年　関　一三

自衛隊のみなさん、毎日毎日暑い中を、ご苦労さまです。ぼくたちは、とても苦労されているみなさんに、少しでも協力できた事を、とてもうれしく思っています。現地での、大変さはぼくたちには分かりませんが、少なくとも以前よりは皆さんの仕事の大変さが分かりました。

犠牲者の方々の、遺体の収容作業も大変でしょう。そんないそがしい中で、食事に招待していただき、ありがとうございました。とてもおいしく、とても楽しみなさんといっしょに食事をすることができて、うれしく思っています。

ほんの少しだけの間でしたが、みなさんと親しくできたと思います。この事も、いい思い出になると思います。本当にありがとうございました。

今回(8月12日～8月30日)の災害派遣方多き遺に際しまして自衛隊に関係する方々はる勿論のこと、大勢の人々からだ大きな御見舞いや激励金をいただき本当にありがとうございました。紙面を借りて心から御礼申し上げます。

中部航空警戒管制団司令兼基地司令 空将補 鍛治 茂